

# Oceanstory と Gardens in the Dunes における水

大宅由加利

## はじめに

Leslie Marmon Silko の小説 *Gardens in the Dunes* (以下 *Gardens*) および最新の作品で e-novella である *Oceanstory* の中での水を論じる。Silko は旱魃によって植物が育ちにくいアメリカ南西部の先住民として、水へ敬意を示すこと、決して自然を破壊しないことを繰り返し主張する。*Gardens* と *Oceanstory* では、主要人物の Edward と X は自然への敬意を持たず利益を貪った結果、自然の力によって死に至る。一方、主要人物の Indigo と *Oceanstory* の語り手は自然へ敬意を払い、生き延びる。Silko は書き分けていると言える。本研究では登場人物たちの水と自然への関わり方が彼らの生死を分けたと解釈し、Edward と X がどのように自然に対して礼を欠いたのか、Indigo と語り手がどのように自然を重んじていたかを論じる。

## 1. 自然からの警告

*Gardens* の Edward と *Oceanstory* の X という人物は自己中心的で、利益を貪る。Edward は植物の新種を得ることに血道を上げ、イギリス王立植物園の依頼でブラジルの先住民が住む土地から蘭の新種を、アメリカ政府の依頼で地中海のコルシカ島から柑橘類の新種を盗もうと企てる。繰り返し失敗するが、死ぬ間際まで儲けようとする。不動産業を営む X は、自然を壊し大儲けをしようとするが、失敗する。反省することなく、すぐに次の金儲けを目論む。また、乾燥した南カリフォルニアやメキシコで生活しているにもかかわらず、彼らが水に敬意を払うことはない。一方、*Gardens* の Indigo や *Oceanstory* の語り手は、人間が生き延びていくための水の重要性を認識している。X は、カリフォルニア湾岸に土地を購入し、住宅を建てて儲けようとする。そこは非常に不安定な砂地で、ハリケーンによる高波によってその建物は浸水し、X の計画は水泡に帰す。海の力が彼の計画を壊すように描かれている。X はその後、鬪鶏で大儲けしようとするが、失敗する。浜辺をうろつく野犬によって、鶏が襲われるからである。周囲の自然物を物象化し、それらに注意を向けていないのである。Edward は、ブラジルやコルシカへ植物の収奪に行く。また、X が住宅建設のために購入した海辺の土地は、かつて政府が先住民から収奪した場所である。Edward は自然に敬意を払わなかったため、母なる大地によって罰を受けたのである(Ladapo 95)。Edward の失敗の数々は彼が自然から搾取している間か、その直後に起こっているが、自然を荒らし続けているとどうなるのかについて、彼が学ぶことはなかったのである。Jake Barret-Mills は、自然の理に耳を傾ける機会が複数回あったにもかかわらず、X がそうしなかったと指摘している(271)。Edward と X が死ぬ前の自然からの警告は、自然を壊し続けなければ死が待っているというものである。Edward も X も自然からの警告に気づかないまま、死に至る。

## 2. *Gardens in the Dunes*—Edward と Indigo

Edward はプラントハンターである。欧米の国や企業が、プラントハンターを送り、新種を採集させ、本国で繁殖改良することや市場で売って大儲けすることを目的として、国を挙げて生物資源の搾取や希少な植物の乱獲を行っていたのである。Edward は、繰り返し失敗した後に、懲りもせず、アリゾナのかつて隕石が落ちて来た場所を掘れば、貴金属を成分とする隕石の大きな塊を掘り出せるという儲け話に乗り、隕石を掘ろうとして大雨に見舞われ、肺炎で死ぬ。水に殺されたようなものである。Edward が富を得ようとした理由は、父親や姉のような社会的地位を得て彼らに認められたかったからであると、作品終盤に書かれている。Rebecca Tillett は、Edward が自然を軽んじることが自分自身を軽んじることにつながると述べ、地球への思いやりに欠ける彼の行動は自分自身に対する気遣いのなさと呼応しており、つまるところ彼を殺したのは自身の貪欲さであると指摘する(234)。自然や自身をいたわることなく欲望を追求して、自滅したといえる。自然から鉄槌が下されたと解釈できる。

Edward が死に至ったこととは対照的に、少女 Indigo は生き延びるための自然との向き合い方、例えば、敬意を払い、他の生き物とわずかな食べ物を分かちあうこと、取り尽くさないことを祖母より伝承され、実践する。Indigo はアリゾナ先住民の末裔であり、水の稀少性を理解し、砂丘では水源からの水の供給、確保をかかさず行い、また初めての場所でも植物から水脈を探し当てる。そして、部族の教えによって、貴重な水を確保する場所である泉を守る聖なる蛇に敬意を示す。Indigo が水たまりの中の世界を、生き物たちのコミュニティととらえ、自分が住む食べ物も水も少ない場所と比較して水の豊かさに感銘を受ける場面がある(35)。彼女が、自然界において人間だけが特別ではなく、水の中の小さな生物を人間と同等に考えていると解釈できる。小説は、故郷の乾いた砂丘に雨が降り、Indigo が雨水に恵まれている場面から始まる。小説の始めと最後の双方で、水との関連で、“cool”(13, 477)あるいは“cold”(476)という言葉があり、熱いアリゾナで、Indigo が涼しさに包ま

れていることが分かる。また、水辺の守り神である蛇の子孫が泉に再来して、小説は結ばれる。Indigo が水の豊かさに恵まれていることが表されているのである。

### 3. *Oceanstory*—X と語り手

X は、車を猛スピードで運転して潤れ谷に落ちて死ぬ。X の死因は不明だが、死に場所が磁力のある谷であったことに注目すれば、彼が自然によって仕返しをされたといえよう。谷でX が死んだのは、自然が彼に報いを受けさせたからである(Boyles 32)。X は海辺の住宅を建築する土台のために、山から巨岩を盗んだ。山そのものが、自分を穢した X を殺したと解せる。また X が死んだ谷は、アリゾナ先住民の神話では部族発祥の地、聖なる場所のピナカテ山脈にある。X は平気で聖なる場所を壊したので、海が高波で住宅地を壊し、山の磁力が彼を引きずりこんだ。また、X の母がハリケーンによる洪水で命を奪われたように、いくらあがいても自然の力の前では無力な人間が、小説の最後で描かれている。

X の恋人で助手の語り手は、日常より自然物について理解し、海とともに生きて来た先住民の教えを熟知して実践する。アリゾナ先住民 Tohono O'odham の末裔で、絶大なる海の力を信じている。語り手は書物や先住民の伝承から、人間の力を超える大自然の力を認識している。また自然の甚大なる力には科学的説明がつくことも知っており、月の力とカリフォルニア湾の海水の力によって、バハ・カリフォルニア半島が造られたと考えている。語り手は、X とカリフォルニア湾に小舟で出た際に、船体に穴が開いていて溺れかける。その時、語り手は、“ocean's scrotum”という海藻の固まりにつかまって命拾いする。これは緑色の丸い球体で、通常は野球ボールくらいの大きさである。以前に語り手は、メキシコ先住民が書いた海藻の生態についての書物を海辺に持参しては、実際に見た海藻と結びつけており、飼い犬が海藻から真水を吸う場面も目撃していた。溺れかけた時に、海藻を生きるために活用できたのは、海辺の自然物について熟知していたからだといえる。海では、この海藻の固まりが別の巨大な黒い物体に見えたのだが、メキシコ先住民の言い伝え、「海で黒い鯨に出会ったら、それに背を向けてはいけない」(ch.3)を思い出し、それに従う。大きな海藻の固まりをブイがわりに漂流して、この海藻の中の真水を飲み生き延びる。その後、海藻だけでは漂流を続けられなくなった時、見覚えのあるプラスチック電球が流れ来て浮力を助ける。語り手を救った海藻とプラスチック電球がいずれも球形していたことは重要である。Silko はこの海藻を最初に“greenish globes”(ch.14)、プラスチック電球を“the plastic light globe”(chs.13, 17)等と電球を指す“bulb”ではなく、“globes”という語で表している。海藻やプラスチック電球を小さな地球だととらえると、語り手が直に自然の恵みを受けているようにも見える。語り手は自然物や生き延びを助けてくれるものに日頃より注意を払っていたので、救われたと解釈できる。

### 結論

水との関連で、Edward と X が死ぬまでの過程を見ると、自然による警告から彼らが何も学んでないことが浮き彫りになり、一方、自然に感謝する Indigo と語り手が水の恵みを受けていることが明らかになった。Silko は、小説 *Ceremony* では、暴力はそれを行った人間に戻って来るといふこと、破壊行為は己をも破壊することであると描き(229)、*Almanac of the Dead* では、人間が自然を破壊しても、地球は聖なるままであり滅びるのは人間のみであると警告する(762)。自然の一部にしかすぎない人間にとって、自然を貪り尽くすことはそのまま自分を破滅させることであると、Silko は言いたいのであろう。

### 引用文献

- Barret-Mills, Jake. *Tracing Ideological Creases Through Indigenous Sovereignties: The Dynamic Reciprocity of Silko and Vizenor's Storywork*. 2021. U of East Anglia, PhD dissertation.
- Boyles, Christina. “Writing Water, Writing Life: Silko as Environmental Activist.” *Studies in American Indian Literature*, vol.30, no. 3-4, fall-winter 2018, pp.10-35.
- Ladapo, Brianna L. *How Environment and Nature Reflect Cultural Power Struggles in the Novels of Leslie Marmon Silko*. 2011. Harvard U, MA thesis.
- Silko, Leslie Marmon. *Almanac of the Dead*. Penguin, [1991]1992.
- , *Ceremony*. Penguin, [1977] 2006.
- , *Gardens in the Dunes*. Simon & Schuster, [1999] 2005.
- , *Oceanstory*. E-book ed., Odyssey Editions, 2011.
- Tillett, Rebecca. “‘Sand Lizard Warned Her Children to Share’: Philosophies of Gardening and Exchange in Silko's *Gardens in the Dunes*.” *Leslie Marmon Silko: Ceremony, Almanac of the Dead, Gardens in the Dunes*, edited by David L. Moore, Bloomsbury, 2016, pp. 219-39.